

ある銀行で「当行が融資・支援する会社はどれも良くなっているのに、B社だけは再建がうまくいかない」という話題になりました。S氏に再建へ向けた白羽の矢が立ち、悩んだ末にB社への出向を決断しました。これからの困難を思うと、「大変なことになった」と思わずにはいられませんでした。当時のB社は、ひどい経営状態であったからです。

同じ頃、入院していた父の見舞いに行きました。80歳を過ぎた父に出向の話伝えると、「それはそれでいいじゃないか。お世話になった銀行に恩返しするつもりで頑張りなさい」と励ましてくれたのです。その夜、病室で父と一緒の布団に入って寝ていると、出向先で全力を尽くす覚悟が固まりました。B社に行くからには、徹底してB社の人間になってやろうと意気込み、事前に色々と調べていましたが、社内に入ってみたところ、会社は想像以上に悪い状態でした。

業績が長年にわたり低迷していて、社員の士気が低く、すべてにおいてメリハリが感じられません。ワイシャツのボタンをはずし、ネクタイを緩めているベテランたち。だらしない長髪の若手社員。エレベーターで乗り合わせるでも挨拶さえしない女子社員たち。

そんな彼ら彼女らの意識改革から始めようと、まずS氏が行なったのは、大きな声で挨拶をすることでした。「おはようございます」とリーダーが明るく大きな声で挨拶するだけで、不穏な壁は取り払われていきました。



挨拶に磨きをかけ 社内の連帯感を高める

絵・今谷 鉄柱

そして、少しずつ社内に活気が戻り始め、「一緒にやってみよう」という空気が漂い始めたのです。挨拶を交わすという日常レベルの努力から、S氏の出向の日々は始まったのです。「おはようございます」「ありがとうございます」「おはようございます」など、明るい声が社内でも交わされている会社では、お客様の評判も高まります。挨拶に磨きをかけることによって不景気の中を生き残り、大きく成長していくものです。さらに工場を見て回ると、ひどい状況でした。機械は「時代物」で、効率が悪いと工場長が嘆いています。工場長は「他社の設備は完全自動化されています」「この機械はもう寿命です」と言い、それに従って設備投資をすると、その額は数億にも上る計算です。S氏は「経営の苦労も知らずに、勝手なことばかり…」と思いつつも、迷いが頭の中を駆けめぐりました。そこで改めて、社員一人ひとりに思いをめぐらせたのです。ある日、S氏は全員を集めました。「君たちの要求について、いろいろと考えてみたよし、全部やろう!」。社員全員から歓声が上がりました。「会社は落ちるところまで落ちた。しかし、会社のために頑張ってきた社員のことを考えよう」と決意したS氏。社員が会社を思う「本気度」に賭けたのです。銀行から融資を得て、設備を整えました。各部署が一丸となって新分野にチャレンジを重ね、多くの難問を克服しました。業績はいつしか右肩上がりになっていったのです。